

戦争はなくすことができる

戦争は人間が人間を傷つける最悪の形態の一つです。戦争は自然環境も人間の作りあげた環境も破壊します。戦争は人間がもたら行なってきたことではありません。ディスチャージを自分のものとし、RCを道具として使いこなしている私たちの多くが、戦争を終らせることを目標に掲げ、私たちの知識をそこに応用すれば戦争は止められます。私は戦争の傷を癒すためのワークショップを何回か開いてきました——ヨーロッパで4回（第二次世界大戦の傷を癒すための）、アメリカで2回、オーストラリアで1回、エルサルバドルで1回——そして明確になってきたのは、戦争と暴力に対する感情がディスチャージされていないために、社会変革へ向かう私たちの進行が大きく遅らされていることです。本稿は私がこれまで学んできたことを短くまとめたものです。

戦争の目的

戦争には様々な種類があります——派閥間の争い、宗教間の争い、ゲリラ戦、帝国主義戦争、民族虐殺、内戦、帝国主義からの解放の戦い、もちろん「伝統的」な国家間の争いもあります。戦争の究極の目的は、少数の人々（オーニングクラス）が世界の大部分の資源をコントロールし、消費するためです。世界の大半の人々が苦難に陥れられ、社会的な不公平によって、オーニングクラスの人々に戦争を使って自らの富を増やす力が与えられます。

政府と社会は人々に戦争を支持させるために愛国主義的・民族主義的感情を植えつけ、宗教的感情を操ります。攻撃され殺されるのではない、所有物やアイデンティティや文化を失うのではないかという恐怖を植えつけます。優越感と劣等感のパターンを刺激します。ありとあらゆる形態の抑圧を人々に与えます。

RCの理論と戦争

どんな人も良い人です。このことを私たちは個々の人間関係の中ではいとも簡単に思い出します。しかし政治的なことに反応するとき、私たちはこのことを忘れてしまいがちです。たとえば私たちは政治的リーダーを、その人が持つパターンによって批判することがよくあります。

傷のない人間であれば戦争を始めないでしょう。また、だれかが戦争や抑圧や経済的搾取に苦しんでいるのを黙って見ていないでしょう。すべての人間が大事にされ、世界中の資源が公平に分配され、自然環境が大切に保護されるような世界をつくるでしょう。

ディスチャージされていない傷が家族や文化や社会の中に入りこみ、社会的な抑圧や出来事と複雑にからみ合っています。たとえばドイツ人は第一次大戦を生き延びたあと、悲しみと恐怖と怒りと屈辱を鬱積しました。このことと、長いあいだの経済混乱、激しい反ユダヤ主義、クラシズム、人種差別、民族主義、子どもへの厳格なしつけ、そしてそれらからつくり出されるパターンがファシズムの台頭を生み、1930年代から1940年代にかけての途方もなく破壊的な出来事を引き起こしました。

戦争の影響は過小評価されがち

だれもが戦争によって傷つきます——戦争に行き人殺しをした人、殺されたり負傷したりした人、戦争を直接的・間接的に目撃した人。戦争への準備や戦争を行うことは膨大な資源を浪費します。建設的な事業に資源がまわされなくなります。戦争は過去の文化遺産を破壊します。人々は信頼感を失い、自分を良く思えなくなり、リーダーシップやリーダーへのサポートが阻害されます。戦争は対立する団体の人間同士の関係を悪くするだけでなく、親しい関係をも損ないます。たとえば侵略者に抵抗する人々と協力する人々、戦争に賛成する人々と反対する人々が互いに反目し合うようになります。兵士だった人は戦争に行き人殺しをしたことや、友人や身内が殺されたのに自分は生き延びたことに罪悪感を抱き、無気力や自暴

自棄に陥るかもしれません。戦争に行った人が戦争に行かなかった人に怒りをぶつけるということも起こるかもしれません。

戦争という人間の非理性的な行いを知った若い人はだれもが混乱し、恐怖し、気分を落ちこませます。その傷に直面せずディスチャージしないまましていると、残された傷のレコードは次の世代へと引き継がれます。

戦争への脅威や戦争の存在のために、人々は安心して遊び、つながり合うことができなくなります。たとえば1950年代から1970年代にかけての核武装競争時代に育った人の多くは、世界の未来に対して悲観的な見方をしがちです。

戦争についてセッションする

私たちは戦争についてディスチャージできます。自分自身の経験や自分の身内の経験を話すことから始めてもいいでしょう。戦争のことを初めて知ったのはいつでしょう？ 何の戦争についての話を聞いたでしょう？ 戦争はまわりのおとなにどんな影響をもたらしたでしょう？ 戦争にかんするどんな映画を見たでしょう（どんな本を読み、どんな歌を聴いたでしょう）？ 戦争の歴史について何を学んだでしょう？ 戦争にかんするどんな英雄物語があったでしょう？ 現在行われている戦争についてどんなふうに感じているでしょう？（戦争について一度も話したことのない人が自分の体験を話すことは、長くRCをやってきた人が激しく涙するのと同じくらい貴重なことでしょう）

傷から注目をそらすセッションをすることが有効なときもあります。「ときにはだれかがだれかを好きになる」などというのも効果的です。明るく「人間は戦争を止められる」と言ってみるのもいいでしょう。決断することもできます。「私は戦争を止めてみせる」「私は世界の～地域に平和をもたらしてみせる」というふうに。決断することによって慢性化した絶望感や無力感がコントラディクトされ、その決断を実現するための行動ができるようになります。

敵対し合っている人同士、かつて敵対し合った国に住む人同士の場合、「私たちはみな、こうして一緒に行動している」という方向性が効果的です。過去の反目を乗り越え、互いの痛みを聴き合い、相手を許し、戦争をなくすために団結するときだ、ということ強調するといいでしょう。関係性を築くには時間がかかりますが、戦争を止めるためには欠かせないことです。

戦争を止めるためには適切な方針を立て、たくさんの人々を組織立てしなければなりません。そのためには、人類は必ず戦争を止められるという確信が必要です。確信を持ってそれを示すことは、平和運動家によく見られる絶望感をコントラディクトします。私たちは確信が持てないという気持ちをディスチャージできます。

力とは「自分が理性的に望んだ反応を宇宙から引き出す能力」というように定義できます（注：ハーヴェイ・ジャキンス「再評価カウンセリングの基本原則 7」より。「人間がおかれている状況 第2巻」の中の1章）。力は服従や無感動や絶望と正反対であり、「何をしても変わらない」と言って世界に背を向ける感情と正反対です。力とは決断をし、行動を起こすことを意味します。

罪悪感、絶望、自分を悪く思う感情（抑圧社会によって組織的に植えつけられる感情）が無力感の傷のレコードを存続させます。私たちは自分自身に喜びを感じ、希望に満ち、つねに力強く行動する決断ができます。コミットメントを使って力を取り戻すこともできます。「この瞬間から私は、自分がかかわるすべてのことがうまくいくように責任を果たします。そして、いっさいの限界もためらいもなく、すべてのことにかかわっていきます。その意味は……」私たちはどんなときに力強く、どんなときにそうではないかを探り、ディスチャージすることができます。

私たちは戦争に終止符を打つ時代にいます。それはとてつもなく厳しい戦いでしょう。それに取り組も

うとすることはほんとうにわくわくすることです。

ジュリアン・ワイスグラス
世界変革のための国際紹介者
アメリカ、カリフォルニア州、サンタバーバラ

We Can Eliminate War

プレゼントタイム 2008年10月号 74 - 75 ページより

Julian Weissglass

翻訳 高坂明雄

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳2008年。原文2008年）。
この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。